

チャプマンにおけるホーマー翻訳の諸問題

北 垣 宗 治

チャプマン (George Chapman, 1559?-1634) はすぐれた劇作家であり、同時にすぐれた詩人でもあった。詩人としての彼の本領はホーマーの英語韻文訳において遺憾なく発揮されたと言ってよいであろう。キーツのソネット “On First Looking into Chapman’s Homer” はそのことについての何よりの証明である。もっとも、アーノルドはこれに関して、キーツはギリシア語が読めなかったから、本当はチャプマンのホーマーを判断することはできなかった筈だと評しているが¹、ホーマーのギリシア語をはなれて、あの訳詩が英詩としてキーツを魅了しえたということは、やはり詩人チャプマンのなみなみならぬ力量を証明することになるであろう。

チャプマンのホーマーは、ホーマーの英語完訳としてははじめてのものであって、その出版はイギリスのルネサンス文学の中での歴史的な出来事であったといえる。『イリアド』と『オデッセイ』を完訳することは大事業であった。チャプマンには彼なりの野心と抱負があったのであり、彼は自分の仕事の規模と意義を心得ていた。ただし彼のギリシア語の力は初歩的なものであり、彼はラテン語訳を参照しつつ辞書と取組み、ホーマーと格闘したようである²。小論は、チャプマンがその翻訳の過程で直面し、序文や献辞や、欄外の訳注や巻末の補注 (Commentarius) などを通して表現した諸問題を主として検討することにより、ホーマー英訳に随伴する諸問題の特質に光をあてようとする試みである。

翻訳に関するチャプマンの見解を聞く前に、彼の訳文のサンプルを見る

ことにしたい。これは議論が抽象的に走ることを防ぐための手続きの一部である。私は原典で『イリアド』第1巻26-32行にあたる部分を選び、その複数の訳文を比較検討してみたいと思う。これは『イリアド』冒頭において、自分の娘を返してくれるように願った、アポロの神官カルカスに対して、ギリシア軍の総大将アガメムノンが投げ返す言葉である。最初にかかげるのは、今世紀の訳のうちで最も厳密なものとして定評のある Richmond Lattimore の韻文訳である（ラティモアは原典と同じ行数を守っている）。

‘Never let me find you again, old sir, near our hollow
ships, neither lingering now nor coming again hereafter,
for fear your staff and the god’s ribbons help you no longer.
The girl I will not give back; sooner will old age come upon her
in my own house, in Argos, far from her own land, going
up and down by the loom and being in my bed as my companion.
So go now, do not make me angry; so you will be safer.’

(lines 26-32)³

第二は、チャプマンの *Seaven Bookes of the Iliades* (1598) から。

‘Hence, doating Priest, nor let me find thy stay protracted now
In circuite of our hollow Fleete, or once hereafter know
Of thy returne: for, if I doe, the Crowne thou doest sustaine
And golden scepter of thy God thou shalt present in vaine.
Thy daughter I will not dissolve till age deflower her hed,
Till in my Royall Argive court her bewties strow my bed
And shee her twisting spindle turnes farre from her native shore,
To which if thou wilt safe returne, tempte our contempte no more.’⁴

第三はチャプマンによる、同じ部分の1611年の改訳である。ちなみに、

キーツを感動させたのはこの1611年の訳であった。

'Doterd, avoid our fleete,
Where lingring be not found by me, nor thy returning feete
Let ever visite us againe, lest nor thy Godhead's crowne
Nor scepter save thee. Her thou seekst I still will hold mine owne
Till age defloure her. In our court at Argos (farre transferd
From her lov'd countrie) she shall plie her web, and see prepard
(With all fit ornaments) my bed. Incense me then no more,
But (if thou wilt be safe) be gone.' (lines 25-32)⁵

第四はドライデンが1700年に発表した *Fables Ancient and Modern* の中に収録されているドライデンの heroic couplet 形式の訳文である。

Hence, Holy Dotard, and avoid my Sight,
E'er Evil intercept thy tardy Flight:
Nor dare to tread this interdicted Strand,
Lest not that idle Sceptre in thy Hand,
Nor thy God's Crown, my vow'd Revenge withstand. }
Hence on thy Life: The Captive-Maid is mine;
Whom not for Price or Pray'rs I will resign:
Mine she shall be, till creeping Age and Time
Her Bloom have wither'd, and consum'd her Prime:
Till then my Royal Bed she shall attend;
And having first adorn'd it, late ascend:
This, for the Night; by Day, the Web and Loom
And homely Household-task, shall be her Doom, }
Far from thy lov'd Embrace, and her sweet Naitve Home. }
(lines 39-52)⁶

この四種類の訳文をくらべてみると、いろんなことに気付く。セリフは当然のことながらその発言者の性格を反映するのであるが、先ず全体の調子からすると、ラティモアのアガメムノンは最も大人しく、紳士が諄諄と相手を教えさすような調子である。それは特に“old sir”という呼びかけにあらわれている。心頭から発するきびしい怒りはここにはあらわれていない。“do not make me angry”という表現は、アガメムノンがまだ怒っていないことを示す。それにくらべると、チャプマンとドライデンの訳文からは、怒りは感じられる。それは冒頭の“Hence”や、結びの“be gone”や、“Doterd” (“Dotard”) といった表現の故である。チャプマンのアガメムノンの方がドライデンのそれよりももっと真剣に怒っている印象を与えるのは、ドライデンの場合、いろいろと余分のものをつけ加えたために、若干間延びしているからである。ドライデンの「夜はかくかく、昼間はしかじか」という対照表現は、滑稽でさえある。ドライデンのアガメムノンは好色な大将に仕上げられている。

チャプマンの訳は iambic heptameter (fourteener) であり、ドライデンのそれは heroic couplet であることも、彼らの訳詩のかもしだす調子と無関係ではありえない。殊にドライデンは triplet を好んで用い、その三行目がしばしば Alexandrine になる。そのせいもあって、チャプマンにくらべて、ドライデンの方が意識の度合は濃厚である。チャプマンにしても“(With all fit ornaments)”程度のフレーズはつけ加えているのであるが、ドライデンの“*And having first adorn'd it, late ascend*”といった入念な添加ではない。

Diction の面から見ると、チャプマンとドライデンには、それぞれにお気に入りの表現、用語がある。チャプマンの場合は“*Till age deflower her hed*”で、これはさすがに強力な詩的表現である。ドライデンの場合は“*Captive-Maid,*” “*creeping Age and Time,*” “*Far from thy lov'd Embrace*”などをあげることができよう。(これに1715年のポーブ

訳を加えて比較すればさらに興味深いのであるが、紙数の関係で割愛せざるをえない。

チャプマンはドライデンとくらべてみると難解な言葉を力いっぱい使おうという傾向が目立つ。“let me find thy stay protracted now/ In circuite of our hollow Fleete” や “Incense me then no more” などがその例である。また1598年の訳と1611年の訳をくらべると、後者の方がすぐれている。“Her thou seekst” には単なる “Thy daughter” よりも力強い感情がこもっている。また “tempte our contempte no more” は音の反復のために、怒りの効果が消えてしまいそうである。

ここに1598年の訳と1611年の訳を見たのであるが、チャプマンのホーマーははじめから『イリアド』、あるいは『オデッセイ』として発表されたのではなく、殊に『イリアド』は小刻みに発表されたという経緯がある。そこで、チャプマンのホーマー成立の経過を概観してみたい。

彼はまず1598年に『イリアド』の中の七巻 (*Seaven Bookes of the Iliades*), すなわち第1, 2, 7, 8, 9, 10, 11巻を出版する。詩型は *fourteener*。なぜ第1~7巻とせずに、第3~6巻をとばしたのか、そのへんの事情はわからない。これにはエセックス伯への献辞と、読者への序文(後者は G. Gregory Smith 編 *Elizabethan Critical Essays* 所収。小論では便宜上1598-A と呼ぶ)がついている。次にチャプマンは同じ1598年に『イリアド』第18巻の一部を *Achilles Shield* というタイトルのもとに出版する。詩型には *fourteener* ではなしに *heroic couplet* を用いており、再びエセックス伯への献辞 (*Elizabethan Critical Essays* 所収。1598-B) と、読者への序文 (“To the Understander” と題され、*Elizabethan Critical Essays* 所収。1598-C) がついている。

チャプマンは1608年に『イリアド』の最初の12巻を出版する。すでに上梓したものに、第3, 4, 5, 6, 12巻を加えたものである。これには皇太子

ヘンリーに対する献辞（エセックス伯は1601年に処刑された）と、読者への韻文による序文（後者は J. E. Spingarn 編 *Critical Essays of the Seventeenth Century* 所収、1608-A）がついている。『イリアド』全24巻の出版は欽定訳聖書の出版と同じく1611年である。第1, 2巻はすっかり改訳されている。これには 1608-A に加えて、散文による読者への序文（*Critical Essays of the Seventeenth Century* 所収、1611-A）と、「ホーマーについて」という短いエッセイがついている。

チャプマンの『オデッセイ』は独立して出版された形跡がない。1614年から1616年の間に、1611年の『イリアド』完本に『オデッセイ』が合本のかたちとなって売り出されたと想像される。出版者である Nathaniel Butter は1614年11月2日付で *Stationer's Register* にチャプマンの『オデッセイ』を登録しているのだが、書物についての日付は1616年である。チャプマンを支援してきた皇太子ヘンリーが1612年に若くしてなくなったために、献呈先を又もや変える必要が生じ、彼はそこで、サマセット伯となった Robert Carr に献辞を書いたのである（1616-A）。以上がチャプマンのホーマー成立の概略である。

チャプマンは、のちのドライデンと同様、翻訳が芸術であることを当然のことと考えていた。彼はホーマーを散文に訳すなどということは夢にも思わなかったであろう。ただしホーマーのラテン語訳は散文訳、韻文訳ともに十六世紀には広く読まれていた。チャプマンも Andreas Divus によるラテン語韻文訳をたよりにして訳業を進めたのであった。いな、そのラテン訳がなければ、彼がホーマーを完訳しえたかどうか、疑わしいのである。ほかに Laurentius Valla の散文訳や Eobanus Hessus の韻文訳を参照したことは、補注等にてらしてあきらかである。

ホーマーの翻訳者としてのチャプマンの最大の特徴は、いく分か狂信的とも思えるくらいまでに、自分の崇高な使命を強調したことである。彼は一種のプラトン主義者であり、きわめてロマンチックな性格の持主だった。

彼は十五世紀フローレンスの人文主義者 Marsilio Ficino (1433-99) がラテン語に翻訳したプラトンの『イオン』とその注解を読み、プラトン流の詩人観をもつようになった。すなわち、彼は詩を *divinus furor* (divine frenzy) と見做すのである。

チャプマンは *Euthymiae Raptus : or the Teares of Peace* (1609) という冥想詩の中で、夢の中にホーマーの姿が突如として現れた様子を描写する。妙なる光の中に神々しく出現したホーマーは神格化されたホーマーである。ホーマーは盲目であるから外を見ることはできない。その目は内部の広大な時間と空間を見つめているからである。ホーマーの胸には霊の火が燃えているのが外からもうかがわれる。光と火と霊は、プラトン主義者チャプマンの重要なシンボルである。ホーマーの口から霊の息が炎となって噴出し、恐れ戦く詩人に激励を与える。そのメッセージは、内的なものとは外的なものにくらべて何倍も価値があることと、自分の価値を過少評価してはならないことである。まさしく、これはエマソン的な激励である。詩人は靈感に満たされ、法悦の状態に入る。ホーマーの霊はさらに次のように語り続ける。

I am (sayd hee) that spirit *Elysian*,
 That (in thy natiue ayre; and on the hill
 Next *Hitchins* left hand) did thy bosome fill,
 With such a flood of soule; that thou wert faine
 (With acclamations of her Rapture then)
 To vent it, to the Echoes of the vale;
 When (meditating of me) a sweet gale
 Brought me vpon thee; and thou didst inherit
 My true sense (for the time then) in my spirit;
 And I, inuisible, went prompting thee,

To those fayre Greenes, where thou didst english me.⁷

Hitchin はロンドンの中心部から約50キロ北にあるチャプマンの出身の町である。この引用からわかるように、彼はホーマーの霊から二度靈感をうけた。また上記の引用からすれば、チャプマンは田園でホーマーを訳したことになるが、これは言葉通りに受取る必要はなかろう。しかしチャプマンには、「お前はわたしの霊において、わたしの真意を継承したのだ」という力強い託宣の言葉は、どうしても必要な言葉であったに違いない。チャプマンはホーマーによって、いわば聖職叙任を受けたところの、選ばれた翻訳者であることを天下に印象づけたかったのである。

チャプマンはあらゆる学問にまさって「詩」(Poesie)の価値を高く評価する。彼によれば真の詩人はたえず神と交流する存在なのである。ただし、それがミューズであるのか、あるいは伝統的なキリスト教の説く神であるのか、チャプマンは問わない。ホーマーのような「天上の霊火でもって白熱した、学識のある古代人」(“th’ancient learn’d, heat with celestial fire”)⁸ はただ単に学問だけをひけらかしている現代人とは何という相違であろうか。チャプマンは学者に対して根強い不信の念を表明する。学者というものはあまりに学問の枝葉末節にかまけて、ホーマーの澄明な光を把握できないと彼は考える。「なんじ、魂に盲目のスカリジャーよ」(“thou soule-blind Scalliger”)⁹ という呼びかけは、ホーマーよりもヴァージルの方を高く評価するフランスの高名の人文主義者に対して彼が投げかけた呪詛である。

Julius Caesar Scaliger (1484-1558) は *Poetice* (1561) の第5部において、ホーマーとヴァージルの詳細な比較論を展開し、ヴァージルの洗練されている点を高く評価した。その比較論は学問的で徹底したものであり、ために多くの人文主義者たちの taste はスカリジャーに影響されるようになった。これはホーマーの司祭を自任するチャプマンには我慢のできない

ことであった。彼は1608-Aにおいて強力なホーマー擁護の論陣を張る。その考え方は要するに、ホーマーは太陽で光源体であるのに対し、ヴァーギルは星にすぎない、ということである。その上、彼は『イリアド』の欄外の訳注に、「このシミリーをヴァーギルが使用」と、繰返し書いている。

小論の中心問題であるチャプマンの翻訳論に移りたい。その大きな特色は、詩を靈感の産物とするプラトンの思想に色付けられていることである。これは彼を友人のベン・ジョンソンから区別する点である。ジョンソンの古典文学の世界に対する態度は冷静であり公平である。それはちょうど、彼ら以前にヒエロニムスやエラスムスが、アウグスチヌスやルターにくらべて、聖書のテキストに対して、より冷静でより公平な態度をとりえたことに類似している¹⁰。要するにチャプマンはホーマーに対して中立の立場を取ることができなかつたのである。彼はホーマーに関しては常に情熱的である。「第二の聖書」ともいうべきホーマーの言葉は、いわば神の霊が吹きこまれているのであるから、翻訳する者は、一語一語を辿ることによって、霊的なメッセージを伝えることはとうていできない、とチャプマンは考える。逐語訳は受容れ言語の自然な慣用語法を破壊し、いきおい原典の精神を殺すことになる。チャプマンは逐語訳をすることはできない。しかしながら彼は、原文からあまりにもかけ離れた訳し方採ることもできない。その場合もまた原典の精神は正しく伝えることができないからである。チャプマンは自分の翻訳の理想を逐語訳と「意訳」(paraphrase)の中間に位置付けるのである。それを1608-Aにおいて、彼は次のように宣言する。

... since, so generally,

Custome hath made euen th' ablest Agents erre

In these translations; all so much apply

Their paines and cunnings word for word to render
 Their patient Authors, when they may as well
 Make fish with fowle, Camels with Whales engender,
 Or their tongues speech in other mouths compell.

.....

So the brake
 That those Translators sticke in, that affect
 Their word-for-word traductions (where they lose
 The free grace of their naturall Dialect
 And shame their Authors with a forced Glose)
 I laugh to see; and yet as much abhorre
 More licence from the words then may expresse
 Their full compression, and make cleare the Author:¹¹

ここでチャプマンが「逐語訳の翻訳者たち」(“those Translators. sticke in, that affect / Their word-for-word traductions”)というフレーズによってどういう人々を指しているのかはあきらかでないけれども、それがジョンソン一派の学者的翻訳者たちであったことは大いにありうることである。ジョンソンはホラスの「詩学」を二度も英訳し、弟子たちと世間に対し、翻訳はこうしてするものだ、というデモンストレーションをしてみせたのであった。この英語韻文訳が直訳主義によって一貫していることは博く認められてきた。古典語に精通した人は翻訳にさいし、とかく意味よりは語義の方に一層忠実であろうとする傾向がある。逐語訳はぎごちない訳文を生み出さざるをえない——このような趣旨に基づくあまたの正統的な意識擁護論の線に沿うたものとして、チャプマンの主張を評価することができるのである。

チャプマンが自分の翻訳の方法を弁護している論調から推して、彼が同

時代の人々から、意識しすぎるといふ非難を受けていたことは大いに考えられる。しかし逆に、直訳しすぎたといふ非難はなかったらしい。ただし Millar MacLure は、チャプマンのぎごちない直訳に不満を覚えたことがしばしばあると述べている¹²。それはギリシア語のテキストが難解で、スポンダヌスの注解やディオヴスのラテン訳があまり役立たない場合に起こる現象である。冒頭の訳例で見たように、チャプマンの訳をルースな訳だとすれば、ドライデンの訳は許しがたいほどにルースな訳ということになるであろう。

チャプマンは『イリアド』と『オデッセイ』翻訳の欄外に詳しい訳注をつけ、さらにいくつかの巻末に補注をつけている。この補注は彼の翻訳に対する態度を知る上で重要である。たとえば『イリアド』第5巻の補注の中で彼ははっきりと “no man can worthilie translate anie worthise Poet”¹³ と述べているが、これは十七世紀の終ごろにドライデンが “to be a thorough translator, he must be a thorough poet”¹⁴ と述べたことと符合する。また『イリアド』第17巻の補注で、チャプマンはギリシア語のテキスト（ロエブ版では389-95行に当る）と、ディオヴスのラテン語韻文訳、Valla のラテン語散文訳、Eobanus のラテン語韻文訳と、自分自身の英訳を並べて示し、自分がなぜ意訳せざるをえなかったかを説明している。これは「ホーマーを逐語訳しないというので或る大学者が自分に浴びせかけたきびしい反対論に答えるため」¹⁵ なのである。またしてもここでジョンソンの影がつきまとうように思われる。

チャプマンは、さらにもう一步すすめて、翻訳においてホーマーを「修正する」(improve) ことは、当然許されると考える。これは、しかし、彼がホーマーに欠陥があると考えているからでは決してない。時折、彼はホーマーの精神がより完全に、より真実に即して表現されるために、ホーマーを「修飾する」(adorne) ことが必要だと感じるのである。『イリアド』第14巻の補注の中で彼は言う。

What fault is it in me to furnish and adorne my verse (being his Translator) with translating and adding the truth and fulnesse of his conceit, it being as like to passe my reader as his, and therefore, necessarie? If it be no fault in me, but fit, then may I justly be said to better Homer? Or not to have all my invention, matter and forme from him, though a little I enlarge his forme? ¹⁶

結局のところ、原文からのこの種の逸脱は、彼の翻訳についての基本的な考え方からすれば許容範囲に入るのである。ホーマー翻訳の初期段階、つまり 1598-A において、チャプマンは抽象的ながらも明瞭に、すぐれた翻訳者の義務と基準を次のように規定している。

The worth of a skilfull and worthy translator is to obserue the sentences, figures, and formes of speech proposed in his author, his true sence and height, and to adorne them with figures and formes of oration fitted to the originall in the same tongue to which they are translated.¹⁷

ここでチャプマンが翻訳者の義務として、翻訳の過程において「修飾し」、光沢と装飾をつけ加えることを主張していることは注目すべきことである。なぜなら、これは現代の最大公約数的な意味での翻訳観、つまり原典の忠実な、逐語的で、機械的なうつしかえの作業、といった見方とははっきり区別されるものだからである。この修辭的な修飾の必要性は、ベン・ジョンソンも同じく抱いていた考え方だった。ジョンソンは直訳主義者であったとはいえ、ホラスの「詩学」の英訳において、二行ずつ押韻するカプレット形式を含むところの、最少限度の装飾を採用しているからである。ジョンソンはその翻訳形式として、散文はもちろんのこと、ブランク・ヴァースをも採らなかつた。こうして、ジョンソンとチャプマンとはレトリック

クに関する限り、同じルネサンス的見解を共有していたといえる。それは文学作品における、クインティリアンのいわゆる *ornatus* の重要性ということなのである¹⁸。

このように、チャプマンのホーマーが、ルネサンス時代の詩観に則したレトリカルな翻訳であることが明らかになった。ドライデンのヴァージル、そしてポープのホーマーもまたその線上に立つ。しかも彼らの功績はまさしくそのような翻訳、芸術としての翻訳を成就したことにあったといえる。チャプマンは 1611-A の中でこのような翻訳観をまとめて次のように述べている。

Alwaies conceiuing how pedanticall and absurd an affectation it is in the interpretation of any Author (much more of *Homer*) to turn him word for word, when . . . it is the part of euery knowing and iudiciall interpreter, not to follow the number and order of words, but the materiall things themselues, and sentences to weigh diligently, and to clothe and adorne them with words, and such a stile and forme of Oration, as are most apt for the language into which they are conuerted.¹⁹

この引用文はチャプマンのレトリカルな翻訳に関する信念をほぼ完全に表現したものであるといえよう。

次にチャプマンの *fourteener* について一言したい。彼の『イリアド』が傑作とされるゆえんの一つは、実にこの *iambic heptameter* という詩型に訳されたことである。キーツがチャプマンのホーマーに魅せられたのもそれによってであった。English prosody の歴史を書いたセインツベリは、チャプマンは長篇の物語詩の詩型としての *fourteener* を完成するために生まれてきた人、と評しているほどである²⁰。しかし同時代人であったベン・ジョンソンを含む何人かの批評家には、この一行十四シラブル

の長長い行は面白くなかったものと思われる²¹。チャプマンは1609-Aにおいて *fourteener* の擁護論を展開して次のように述べている。

The long verse hath by prooffe receiu'd applause
 Beyond each other number; and the foile,
 That squint-ey'd Enuie takes, is censur'd plaine.
 For this long Poeme askes this length of verse,
 Which I my selfe ingenuously maintaine
 Too long our shorter Authors to rehearse.²²

チャプマンの *fourteener* 擁護の言葉はこれだけであって、まことに物足りない。自己の豊かな訳詩体験に基づいて、その秘訣や苦心のほどを詳述してほしいところである。彼を賛美してやまないセインツベリは、彼の詩法を分析して、その精緻な技巧、特に *caesura* の使い方の巧妙さに驚嘆している。セインツベリはまた、チャプマンが『イリアド』に *fourteener* を、そして『オデッセイ』には十シラブルのカプレット形式を用いたことを是とし、次のように述べている。

The ancients had drawn a distinction between the simple and passionate *Iliad*, the complex and manners-painting *Odyssey*. The old *fourteener*, with its age-long history, its ballad associations, corresponded to the former description; the modern and rather sophisticated decasyllabic couplet to the latter.²³

興味深いことに、チャプマン以前に *fourteener* を用いて成果をあげた Thomas Phaer の *Aeneid* や Arthur Golding の *Metamorphoses* は、ともに翻訳作品であった。

ところで、いったいチャプマンは自国語である英語をどのように見ていたのだろうか。というのは、真剣な詩人であれば自国語の現状について深

刻な関心を抱かざるをえないからである。一口で言えば、チャプマンは英語をホーマーの世界の壮大さと美しさを表現しうるだけ成熟した言語と信じていた。彼にはラテン語の壮重さに酔い、ために野蛮に見える現代語に自信をもてないといった一部のひよわな人文主義者の傾向は見られない。英語に関して彼はナショナルリストなのである。1598-B の中で彼は次のように主張している。

And if Italian, French, & Spanish haue not made it daintie, nor thought it any presumption to turne him [Homer] into their languages, but a fit and honorable labour and (in respect of their countries profit and their poesies credit) almost necessarie, what curious, proud, and poore shamefastnesse should let an English muse to traduce him, when the language she workes withall is more conformable, fluent, and expressiue.²⁴

新造語 (neologism) についてもまた、チャプマンは、これを忌避することによってではなく、これの多用をすすめることによって、やはりナショナルリストぶりを発揮する。彼は十分に意味が表現できて、ひびきがよいという、この二つの条件さえ満たしていれば、新造語をどんどん英語に取り入れて差支えないと考える。彼はまた、他の現代ヨーロッパ語とくらべて、英語に単音節語が非常に多いことを、詩作上きわめて有利な特質であるとしている²⁵。

チャプマンの翻訳論は主として『イリアド』翻訳の完成に至る1598年から1611年にわたる13年間にあらわれた。彼の『オデッセイ』につけられた献辞や欄外の注になると、訳者の関心は別の方面に移る。今や彼はホーマーの二大叙事詩を比較検討しうる状況にあり、しかも『オデッセイ』を『イリアド』よりも一層高く評価する。その理由は『イリアド』がアキレスに代表されるように、英雄の活動的な徳（すなわち外面的な性質）をあ

らわすのに対し、『オデッセイ』の場合は主人公ユリシーズ（チャプマンは Odysseus の代りに Ulysses という呼び名を用いる）の、ストイックな、内面的な徳と知恵の方を一層重要視するようになったからである。年齢五十代のなかばに達したチャプマンは、エセックス伯の刑死をはじめ、人生の悲劇的な面をつぶさに経験してきた。彼が英雄的な徳の空しさを感じたろうことは想像にかたくない。こうして彼はキリスト教的な敬虔さに新しい希望を見出すようになる。ユリシーズがトロイから帰郷する途中で次々に遭遇する苦難は、いつしかチャプマン自身が人生で味わう苦難と同化していく。

この段階でチャプマンは、詩の力を 1616-A の中において次のように解釈する。

Nor is this all-comprising Poesie phantastique, or meere fictive, but the most material and doctrinall illations of Truth, both for all manly information of Manners in the yong, all prescription of Justice, and even Christian pietie, in the most grave and high-governd. To illustrate both which in both kinds, with all height of expression, the Poet creates both a Bodie and a Soule in them—wherein, if the Bodie (being the letter, or historie) seemes fictive and beyond Possibilitie to bring into Act, the sence then and Allegorie (which is the Soule) is to be sought—which intends a more eminent expresseure of Vertue, for her lovelinesse, and of Vice, for her uglinesse, in their severall effects, going beyond the life than any Art within life can possibly delineate.²⁶

このようにチャプマンは、詩の魂はアレゴリであると考えた。彼は『オデッセイ』のアレゴリカルな解釈に乗出していく。ユリシーズの帰郷の物語は旅のパターンをもつものであり、旅は文学においては常に人生の象徴で

ある。チャプマンのアレゴリカルな解釈はキリスト教的なアレゴリの調子を帯びていく。たとえば彼はカリュプソの島にとじこめられているユリシーズについて、次のようなコメントを欄外に記している。

This is thus translated the rather to expresse and approve the Allegorie driven through the whole *Odysseys*—deciphering the intangling of the wisest in his affections and the torments that breede in every pious minde, to be thereby hindred to arrive so directly as he desires at the proper and onely true naturall countrie of every worthy man, whose haven is heaven and the next life, to which this life is but a sea in continuall aesture and vexation.²⁷

うがった解釈で興味深くはある、だが同時にこれは困ったコメントでもある。というのは、チャプマンは『オデッセイ』という叙事詩の中に組み込まれたアレゴリを見ているだけでなく、さらに進んで、ユリシーズを意識的に敬虔な人物に仕立て上げようとしているからである。第1巻で女神アテナがゼウスにむかって、オデッセウスのために訴えるくだりを訳すにあたり、チャプマンは“His more pious mind” (line 81), “Though unkind / Is Pietie to him . . .” (lines 82-83)といった表現を用いるのであるが、これらの表現はギリシア語のテキストには見当たらないものである。このようにチャプマンのユリシーズは旧約聖書の義人ヨブのような、「いわれなくして苦難を受ける人」のイメージを与えられたのである²⁸。これは皮肉な効果をひきおこす。ギリシアの女神がユダヤ教・キリスト教的な発言をしているからである。

ドライデンとの関連を要約することによって、小論を終えることにしたい。チャプマンの翻訳論はいろんな意味でドライデンに影響を与えたものと思われる。たしかにドライデンはチャプマンのホーマーを評価しなかつ

た²⁹。しかし翻訳に関する彼の基本的な立場、すなわち逐語訳と極端な意訳を避けて中道を取るという考え方は、チャプマンのそれとほとんど同じである³⁰。両者とも、それぞれギリシアとローマの最高の作品に挑戦して、それぞれ成功をおさめた。翻訳に関しては両者とも、現代風な、「科学的な」、直訳的翻訳を理想とは考えなかった。詩人としての彼らの本能はそういうものを峻絶したからである。両者ともレトリカルな工夫と、翻訳における最少限度の道徳的な方向付けを必要と考えて実践した。両者ともに学者を嫌悪し、詩人のみが偉大な詩を訳す資格があると考えた。両者とも訳詩が自己の天才を傾注するに値する芸術創造であると信じて疑わなかった。ただし性格についてみる限りでは、チャプマンは情熱的で、靈感を重んじるプラトン主義者であるのに対し、ドライデンは洗練された表現と理性を重んじる人であり、アリストテレス的ないしホラス的な面をもち、ドラマのみならず翻訳という芸術にも規則を導入することに自己の使命を感じて、これを実践したのであった。

注

- 1 Matthew Arnold, *On the Classical Tradition*, ed. by R. H. Super (Ann Arbor: University of Michigan Press, 1960), p. 112.
- 2 Millar MacLure, *George Chapman: A Critical Study* (Toronto: University of Toronto Press, 1966), pp. 171-72.
- 3 Richmond Lattimore, trans. *The Iliad of Homer* (Chicago & London: University of Chicago Press, 1951), p. 60.
- 4 Allardyce Nicoll, ed., *Chapman's Homer* (Princeton: Princeton University Press, 1956), 1: 510.
- 5 *Ibid.*, 1: 24.
- 6 James Kinsley, ed., *The Poems of John Dryden* (Oxford: Clarendon Press, 1958), 4: 1585.
- 7 Phyllis Brooks Bartlett, ed., *The Poems of George Chapman* (New York: Modern Language Association of America, 1941), pp. 174-75.
- 8 *Chapman's Homer*, 2: 510.
- 9 G. Gregory Smith, ed., *Elizabethan Critical Essays* (London: Oxford Uni-

- iversity Press, 1904), 2: 301.
- 10 この点については稿をあらためて論じてみたいと思う。この問題について最も深い示唆を与えてくれる書物は W. Schwarz, *Principles and Problems of Biblical Translation* (Cambridge University Press, 1955) である。
- 11 J. E. Spingarn, ed., *Critical Essays of the Seventeenth Century* (London: Oxford University Press, 1908-09), 1: 77-78.
- 12 Millar MacLure, *George Chapman: A Critical Study*.
- 13 *Chapman's Homer*, 1: 90.
- 14 John Dryden, *Of Dramatic Poesy and Other Critical Essays*, ed. by George Watson (Eveymans's Library, 1962), 2: 20.
- 15 *Chapman's Homer*, 1: 368.
- 16 *Ibid.*, 1: 295-96.
- 17 *Elizabethan Critical Essays*, 2: 296.
- 18 MacLure, p. 224.
- 19 *Critical Essays of the Seventeenth Century*, 1: 72.
- 20 George Saintsbury, *A History of English Prosody* (1906; reprint ed., New York: Russell & Russell, 1961), 2: 108.
- 21 C. H. Herford, Percy and Evelyn M. Simpson, ed., *Ben Jonson* (Oxford: Clarendon Press, 1925-52), 1: 133. ただし Drummondの記録では “the translations of Homer and Virgill in Long Alexandrines were but Prose.” となっている。
- 22 *Critical Essays of the Seventeenth Century*, 1: 78-79.
- 23 Saintsbury, 2: 108.
- 24 *Elizabethan Critical Essays*, 2: 300.
- 25 *Critical Essays of the Seventeenth Century*, 1: 79.
- 26 *Chapman's Homer*, 2: 5.
- 27 *Ibid.*, 2: 14.
- 28 MacLure, p. 193.
- 29 *Of Dramatic Poesy and Other Critical Essays*, 2: 167.
- 30 *Ibid.* 1: 268-72.